

# 東日本大震災におけるボランティア活動を通じた体験と学び

——震災から5年目の被災地訪問記録より——

阿 部 利 江

要旨：筆者は東日本大震災以来、被災した地域を訪問して避難所や仮設住宅にてボランティア活動をおこなってきた。そこで2015年度および2016年度に取組んだボランティア活動より学生の活動記録を整理した。このボランティア活動には、主に、①被災した地域の実状を知る（被災した建物や情報交流館の見学）、②仮設住宅に暮らす子どもたちの遊びを支援する、③他のボランティアグループと共同で支援をおこなう、という3つの特色がある。その結果、いつまでも『被災地』が生活困難な場所ではなく、時間の経過とともに、そこで暮らす人々は変化に応じた生活の営みを創り出していること、また、津波被害の爪痕を残す建物を目にして、その場で起きた出来事を想像しながら、命の尊さを改めて考えることにもなった。そして、このボランティア活動を通して、「生命」の尊さを学ぶことも防災教育のひとつに結び付けられるのではないかと示唆した。

キーワード：東日本大震災、ボランティア活動、防災教育

## はじめに

近年、日本ではいくつもの自然災害が発生している。いつ、どこで、だれが自然災害に遭遇するのかを予想することは困難であり、日頃からの防災・減災意識、備えが大切であることは言うまでもない。しかし、悲惨な出来事は繰り返されるもので、自然災害が発生する度に人々は不自由な生活を強いられ、ときには命までもが失われている。

筆者は2011年3月に東日本大震災（以下：震災と記す）を経験し、当時の様子を鮮明に記憶している。変わり果てた惨状と今を生きることでしかない人々の姿が忘れられない。そして、筆者も被災した地域に暮らしながら復旧や復興の過程を見続け、被災した人々の生活を支援するボランティア活動に取り組んできた。本稿はこれまでに筆者が取組んだボランティア活動のひとつを記していく。

## I. 研究の背景

筆者は震災以来、定期的に避難所や仮設住宅を訪問し、そこで暮らす人々の生活実態を見聞きしながらボランティア活動を続けてきた。これまでに筆者とともにボランティア活動をおこなっ

た学生は延 300 名を越えている。筆者はこのボランティア活動を始めた当初より、被災した地域で出会う人々（支援者も含む）との会話を重視しながら交流を深め、長期的に関われる支援の展開を心掛けてきた。そのため、大規模なイベントを開催することや炊き出し、物資などを提供することはなく、筆者や学生が少人数でも可能な支援内容を考えてボランティア活動を続けてきた。

これまでのボランティア活動を振り返ると、ある学生の記録に「先の見えない生活を送る方々と関わり、悲しい現実と向き合いながら、今を精一杯生きようとする気持ちが伝わってきた。そして、一緒に昼食の時間を過ごしたら喜んでくれた。これで活動を終わりにしたくない。この人たちの力に少しでもなりたいたいと思った。」と記している。そして、「行く度、行く度に必要とされる支援が違い、求められる支援に応えられない時もありました。しかし、避難所で私たちを楽しみに待っていたことを知った時は嬉しかったです。」と記した学生もいる。学生は避難所で自らの存在が必要とされていることを感じ、自分に出来ることは何かを考えながら取組んでいたことがわかる。また、2012年8月より約3年にわたり、ある仮設住宅でボランティア活動をおこなった学生は、「自分たちが決めた人（対象者）ではなく、そこに住む方々の思いを大切に、個人から集団までそれぞれの支援を考えていくことが必要だ」と語り、筆者（2015: 34）は、そのインタビュー内容からボランティア活動が学生自身の学びにもつながっていたことを述べた<sup>1)</sup>。この震災での学生ボランティアの教育効果は、和井田ら（2013）も被災地でのボランティア活動から学生自身が出来ることを探し、工夫した支援を継続することが大切だと示唆している。そして「それは、被災地の学校を応援するという意味にとどまらず、教職をめざす学生が、ボランティアの精神を学び、児童を理解し、防災を学び、困難を乗り越えて他者の役に立つ良さを学ぶという、大事な経験の場になっているからである」と述べている<sup>2)</sup>。筆者の経験からも、学生は被災した地域の実情や被災された人々の心情を想像できなかった自分に気づき、ボランティア活動を通して自らの知識や技術、能力を知り、これからの課題を意識する自己覚知ができたのではないかと言うことができる。

しかし、震災から5年以上の月日が経過した今日、筆者はボランティア活動に参加する学生の目的が震災当初と異なる点をいくつか感じている。震災当初は学生から「被災者のために役立ちたい」や「自分も何かをしたい」という強い使命のような思いが感じられた。そのため、三浦ら（2012: 28）は、避難所でのボランティア活動に参加した学生の様子から、ソーシャルワークを学ぶ学生としてその行為を意識し、そこから何かを学んで欲しいと思ったことを述べ、学生の活動記録を整理している<sup>3)</sup>。だが、今日のボランティア活動では、学生の「自分も被災地支援をやってみよう」という意欲に加えて、「被災地に行ってみよう」や「どんな様子なのか見てみたい」という被災した場所への関心が高いように感じられる。ある学生は、「このボランティア活動に参加することで一人では行けない被災地に行く機会ができた」と語っている。震災からの時間の経過とともにボランティア活動の内容にも変化があることは言うまでもない。

## II. 研究目的

本研究は、筆者が2015年度および2016年度に取り組んだボランティア活動に限定して振り返える。そして、このボランティア活動に参加した学生の活動記録を整理して体験や学びから考察する。

## III. 研究方法

### 1. 活動スケジュール

2015年度および2016年度のボランティア活動は、1日のスケジュールを設定して取り組んだ。そして、主に3つの特色（①被災した地域の実状を知る（被災した建物や情報交流館の見学）、②仮設住宅に暮らす子どもたちの遊びを支援する、③他のボランティアグループと共同で支援をおこなう）を打ち出した。1日の活動スケジュールを表1に記す。

表1. 1日の活動スケジュール

時間	動向	内容
9:30	集合（移動） 見学	被災した建物や情報交流館を見学して被災状況を理解する （※筆者が説明を加えながら、それぞれ20分程度の見学をおこなう）
10:30	仮設団地 到着 ボランティア活動	子どもたちの遊び・学習支援 （※他のボランティアグループと共同で活動をおこなう）
14:00	仮設団地 出発	
15:00	解散	

※他のボランティアグループとは、2012年4月以来、毎月仮設住宅を訪問して支援を続けているグループである。筆者らは、このボランティアグループと活動日を合わせて一緒に取り組んだ。

### 2. ボランティア活動日程

2015年度および2016年度は計13回（12月予定含）のボランティア活動に取り組んだ。仮設住宅でのボランティア活動時間は1回3時間30分ほどである。ボランティア活動日と主な活動内容を表2に記す。

表2. ボランティア活動日と主な活動内容

	活動日	主な活動内容	参加学生数
2015年	8月5日	粘土遊び	4
	8月6日	水遊び	3
	8月7日	夏祭り(子供会合同・出店昼食)	2
	10月17日	秋祭り(自治会合同・出店昼食)	6
	11月14日	自由遊び	3
2016年	12月19日	クリスマス会(ゲーム)	15
	1月16日	自由遊び	9
	4月2日	子ども春祭り(ゲーム・出店昼食)	0
	5月14日	自由遊び	0
	6月25日	自由遊び	0
	8月6日	自由遊び(工作, 水遊び, 出店昼食)	3
	10月15日	自由遊び	4
	12月予定	クリスマス会(ゲーム)	未定

※4月20日, 5月14日, 6月25日のボランティア活動には学生が参加していない(0名)。

### 3. 対象者

ボランティア活動に参加した学生49名のうち, 活動記録を提出した33名を対象とした。

2015年度および2016年度におこなったボランティア活動(計13回)は, 単発で参加した学生ばかりのため, 対象とした33名は全て異なる学生である。

### 4. 手続き

ボランティア活動に参加した学生には, 筆者が独自に5つ項目を設定して活動記録の記入を依頼した(全て自由記述)。質問項目を表3に記す。

ボランティア活動に参加する学生には1日のスケジュールなどを事前に説明する際, 活動記録の記入も依頼して用紙を配布した。活動記録用紙の提出はボランティア活動終了後に随時おこなった。

表3. 5つの質問項目

- |  |
|--|
| 1) 被災した地域を訪問してどのように思いましたか(感想)。                     |
| 2) 被災者(地)がどのようなことに困り苦労していると思いましたか。                 |
| 3) あなたが被災者(地)にできる支援はどのようなことですか。                    |
| 4) あなたの取り組みで良かった点と工夫が必要だった点はどのようなことですか(自己評価)。      |
| 5) ボランティア活動の良かった点と工夫が必要だった点はどのようなことですか(活動プログラム評価)。 |

## 5. 調査・分析方法

本研究は2015年8月5日から2016年10月15日までのボランティア活動に参加した学生33名の活動記録を用いた。そして、学生が項目ごとに記述した内容を筆者がKJ法にて整理し分析した。本稿の結果には学生が記述した内容の一部を抜粋して記す。

なお、本研究で用いる活動記録の内容がこれからの学生個人の生活や成績等に影響を及ぼさないことを配布時に説明し、個人が特定されないよう統計的な処理や分析をおこなうことで同意を得た。

## IV. 結 果

### 1. 被災地域を訪問した感想

被災地域を訪問してどのように感じたのかを「被災の衝撃」「復興の状況」「復興への願い」「震災の継承」の4つにカテゴリー化した(表4)。

表4. 学生が感じた被災地の実状 (N = 33)

カテゴリー	概念	主な記述内容
【被災の衝撃】	被害を受けた場所に衝撃を受ける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>震災以前の様子が写っている写真と比べて、海沿いは建物が無くなって、どれだけ恐ろしい地震だったかを感じることができた。</li> <li>津波の被害に遭った地域を見て、改めて災害の恐ろしさを感じた。</li> <li>犠牲になった方々の苦しい思いを考えると、テレビの映像で見た時よりも何倍も胸が苦しくなった。</li> <li>写真や映像でしかわからなかった被災地の様子を見て、今も深い爪痕が残っており、悲惨な状況を経験した方の辛い思いを考えさせられた。</li> <li>被害に遭った建物を見て津波の恐ろしさを感じ、自然には逆らうことが無意味だと思った。</li> <li>未だに瓦礫や崩壊した建物があった。震災当時を思い出せば辛い経験をされた方々が多いと思う。</li> <li>被害を受けた建物を見て、津波によって簡単に破壊されてしまうことを知った。</li> <li>津波被害を受けた建物や慰霊碑を見て、震災の規模の巨大さを再認識した。</li> <li>テレビや新聞で見た風景が目の前にあり、被害の大きさを感じた。慰霊碑や残された建物、更地を見ていたたまれない気持ちになった。</li> </ul>
【復興の状況】	復興が感じられない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>たくさんのトラックやダンプが通行して工事が行われていた。</li> <li>自分が想像した以上に仮設住宅があり、未だに多くの人が仮設住宅に住んでいることに驚いた。</li> <li>未だに復興作業が追いつかず、あれからずっと仮設住宅に住み続けている人を見ると苦しくなった。</li> <li>新しい生活を待ち望む思いと被災者であるというまだ辛い思いが紙一重に感じる光景だった。</li> <li>被災者の生活状況はあまり変化していないと感じた。</li> <li>復興が進んでいるとははっきり言えない状況だった。</li> <li>自分の街に比べて沿岸地域の復興は進んでいないように見えた。</li> <li>メディアで震災情報は減り、被災地の復興は進んでいるイメージがあるように思う。しかし、あまり復興は進んでおらず、これからだという印象を受けた。</li> </ul>

カテゴリー	概念	主な記述内容
【復興への願い】	これからの生活に期待する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮設住宅から復興住宅に移って生活している人が増えているので、少しでも早く元の生活に戻れると良いと思った。</li> <li>・少しずつ復興はしていると思うが、早く地域が再生されることを願いたい。</li> <li>・被害を受けた建物が観光スポットようになっていたが、狭い仮設住宅で生活をしている住民の方がより良く過ごせる環境づくりに力を入れるべきだと複雑な気持ちになった。</li> </ul>
【震災の継承】	震災の風化を防ぎ、教訓を語り継ぐ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災した場所を残すことで震災を忘れないと思う。</li> <li>・変わり果てた地域の様子を見て、絶対に風化させてはならないと思った。</li> <li>・津波の被害を受けた建物を見て、二度と同じようなことは起きてほしくないと思った。</li> <li>・災害の怖さをもっと多くの人に知ってもらい、今後の対策につなげてほしいと思った。</li> <li>・街を復興して住民の生活を安定させていくことは重要だが、被害を受けた建物を見て、震災のことを忘れないためには遺構に残すことも必要だと思った。</li> <li>・震災を忘れないようにするためには、被災した建物を整備して語りつなぐことも必要だと思った。</li> <li>・様々な物を失った人は大勢いるが、この震災を通して何かを学び、人とのつながりについて考えるようになった人も数多くいるのではないかと感じた。</li> </ul>

学生は「震災以前の様子が写っている写真と比べて、海沿いは建物が無くなって、どれだけ恐ろしい地震だったかを感じることができた。」や「犠牲になった方々の苦しい思いを考えると、テレビの映像で見た時よりも何倍も胸が苦しくなった。」「津波被害を受けた建物や慰霊碑を見て、震災の規模の巨大さを再認識した。」と記している（【被災の衝撃】）。また、「自分が想像した以上に仮設住宅があり、未だに多くの人が仮設住宅に住んでいることに驚いた。」や「メディアで震災情報は減り、被災地の復興は進んでいるイメージがあるように思う。しかし、あまり復興は進んでおらず、これからだという印象を受けた。」と現状の様子も記された（【復興の状況】）。津波の被害を受けた建物に衝撃を受け、復興に時間を要している地域の様子を自分の目で確かめられたことがわかる。加えて、「仮設住宅から復興住宅に移って生活している人が増えているので、少しでも早く元の生活に戻れると良いと思った。」などとこれからの生活への願いや、「変わり果てた地域の様子を見て、絶対に風化させてはならないと思った。」などと震災の継承を望む内容を記す学生もいた（【復興への期待】と【震災の継承】）。

## 2. 学生が感じた被災者（地）の困りごと

学生は被災者（地）がどのようなことに困り、苦勞していると思ったのかを「生活の場」「交通の便」「コミュニティづくり」「被災者の心情」「支援体制」「復興事業の行方」「震災の風化」「わからない」の8つにカテゴリー化した（表5）。

表 5. 学生が感じた被災者（地）の困りごと（N = 33）

カテゴリー	概念	主な記述内容
【生活の場】	仮設住宅での生活が不自由である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮設住宅は建物が簡略的で隣人との距離感がない。</li> <li>・仮設住宅では生活音などのプライバシーを気にしている。</li> <li>・仮設住宅の狭い空間で生活をしなければいけない。</li> <li>・仮設住宅は狭くて物が増えていくと暮らしやすい環境とは言えない。</li> <li>・仮設住宅で長く暮らしている。</li> <li>・ゆっくりできる広い家がほしい。</li> <li>・自宅で暮らしたい思いがある。</li> </ul>
	子どもの勉強や遊び場がない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの遊び場がない。</li> <li>・子どもたちの遊ぶ場所が少ない。</li> <li>・子どもたちの遊ぶスペースが狭い。</li> <li>・子どもが勉強できる場所が限られている。</li> </ul>
	身体を動かせる場所がない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体を動かせる場所が限られている。</li> </ul>
【交通の便】	周囲にお店がなく購入が大変である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スーパーが近くにないため生活用品をすぐに買いに行けない。</li> <li>・買い物はスーパーの移動販売を利用している。</li> <li>・お店までの距離が遠くて高齢者は買い物が大変だ。</li> </ul>
	移動するのが大変である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠くに行く機会がない。</li> <li>・学校に通学するのが大変だ。</li> </ul>
【コミュニティづくり】	住民の交流機会が乏しい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域との関わりが薄い。</li> <li>・話を聞いてくれる相手が少ない。</li> <li>・みんなで集まれる施設が少ない。</li> </ul>
【被災者の心情】	被災者がストレスを発散できない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・息抜きする場所がない。</li> <li>・思いを発散することが難しい。</li> <li>・精神的につらいと思う。</li> <li>・寝る時に不安を感じて寝付き悪いのではないかと予想する。</li> <li>・仮設住宅に住んでいると孤独を感じてしまう。</li> </ul>
【支援体制】	望まれる支援が少ない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの勉強など学習支援のサポートがなく困っていると思う。</li> </ul>
【復興事業の行方】	復興が遅れている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・復興住宅が足りない。</li> <li>・慣れ親しんだ土地で生活が送れない。</li> </ul>
	復興工事と隣り合わせの生活で危ない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トラックやダンプの出入りで仮設住宅の敷地内が安全でない。</li> </ul>
【震災の風化】	震災の風化が懸念される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災地以外に住む人から震災が忘れられてきている。</li> <li>・復興整備や対策により被災者の思い出や記憶がハード面で消されていく。</li> </ul>
【わからない】	困りごとがわからない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何も困っている様子は無かった。</li> <li>・被災者が困っている様子を目にできなかった。</li> </ul>

学生は「仮設住宅の狭い空間で生活をしなければいけない。」や「子どもたちの遊ぶ場所がない。」、「身体を動かせる場所が限られている。」など、長期化する仮設住宅での暮らしを記した（【生活の場】）。そして、「買い物はスーパーの移動販売を利用している。」や「学校に通学するのが大変だ。」、「みんなで集まれる施設が少ない。」など、地域社会とのつながりにも苦労があるのではないかと記している（【交通の便】と【コミュニティづくり】）。また、「子どもたちの勉強など学習支援のサポートがなく困っていると思う。」や「被災地以外に住む人から震災が忘れられてきている。」など、今後も望まれる支援と震災の風化を懸念する内容も記された（【支援体制】）。

と【震災の風化】)。しかし、「被災者が困っている様子を目にできなかった。」と困りごとがわからないと記す学生もいた（【わからない】)。

### 3. 学生自身ができる被災者（地）への支援

学生は、被災者（地）にどのような支援をおこなうことができると思うのかを「共同・交流活動」「精神ケア」「傾聴」「物の提供と購入」「震災の継承」「ボランティア」「継続的な関係」「わからない」の8つにカテゴリー化した（表6）。

表6. 学生（自分）が出来る被災者への支援内容（ $N = 33$ ）

カテゴリー	概念	主な記述内容
【共同・交流活動】	被災者の笑顔を引き出す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少しでも被災者が笑顔になれるような活動を行う。</li> <li>・笑いが絶えない楽しい時間や雰囲気づくりをする。</li> <li>・遊びを通して子どもたちの笑顔を増やす。</li> <li>・被災者に元気を与える活動を行う。</li> <li>・子どもたちに元気になれるきっかけを作る。</li> </ul>
	子どもたちの遊び相手や学習支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの相手になる。</li> <li>・遊び相手になる。</li> <li>・安全に子どもたちと遊ぶ。</li> <li>・勉強のサポート（学習支援）を行う。</li> </ul>
	イベントを通して被災者と交流しコミュニティづくりに参加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域のお祭りなどに参加して被災者と交流する。</li> <li>・被災者と交流を深めてお手伝いやイベントに参加する。</li> <li>・コミュニティづくりに参加する。</li> </ul>
	引越しなどの力仕事を担う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力仕事を行う。</li> <li>・引越しの荷物運びを行う。</li> </ul>
【精神ケア】	被災者の精神的なストレスを軽減させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災者の辛い思いを軽減し取り除く活動をする。</li> <li>・リフレッシュできる時間を一緒に過ごす。</li> <li>・交流機会を設けて精神的な負担を軽減させる。</li> <li>・子どもたちと一緒に遊んでストレスを開放してあげる。</li> </ul>
【傾聴】	傾聴する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災者の話を聞く。</li> <li>・被災者の声を聞く。</li> <li>・被災者と直接関わり、寄り添う。</li> </ul>
【物の提供と購入】	募金や物資の提供と生産品を購入する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災地の生産物を購入する。</li> <li>・被災者の手作り品を購入する。</li> <li>・募金をする。</li> <li>・物資を提供する。</li> </ul>
【震災の継承】	震災を風化させない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の目で見た被災地の現状を周囲の人に伝えて風化させない。</li> <li>・震災を忘れない。</li> </ul>
【ボランティア】	ボランティアの仲間を増やす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア仲間を増やす。</li> </ul>
	ボランティア活動に参加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアをする。</li> <li>・ボランティア活動に積極的に参加する。</li> </ul>
【継続的な関係】	被災地を訪問して被災者との関係を築く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的に被災地を訪問して被災者と信頼関係をつくる。</li> <li>・被災者と信頼関係を築くために継続的に活動する。</li> <li>・現地を訪問する。</li> </ul>
【わからない】	出来る支援はわからない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからない。</li> <li>・ない</li> <li>・個人では難しい。</li> </ul>



学生は「少しでも被災者が笑顔になれるような活動を行う。」や「被災者と交流を深めてお手伝いやイベントに参加する。」「被災者の辛い思いを軽減し取り除く活動をする。」など、震災で辛く悲しい体験をしている方々の思いを汲み取り、一緒に時間を過ごすことで本来の笑顔を引き出す支援を記した（【共同・交流活動】と【精神ケア】、【傾聴】）。また、このボランティア活動は、主に仮設住宅に暮らす子どもたちと関わる時間が長かったため、「遊びを通して子どもたちの笑顔を増やす。」や「子どもたちの相手になる。」と多く記された。しかし、被災した地域での直接的な支援ばかりではなく、「被災地の生産物を購入する。」や「自分の目で見た被災地の現状を周囲の人に伝えて風化させない。」なども記されていた（【物の提供と購入】と【震災の継承】）。一方で、「個人では難しい。」と自分ができる支援はわからないと記す学生もいた（【わからない】）。

#### 4. 自己評価（個人の取り組みで良かった点と工夫が必要だと思った点）

自分の取り組みで良かった点を「人間関係の構築」「周囲への配慮」「被災地域の理解」の3つにカテゴリー化した（表7）。また、工夫が必要だと感じた点を「積極的な姿勢」「対応の難しさ」「活動者の連携不足」「活動目的の消化不良」「事前の準備不足」の5つにカテゴリー化した（表8）。

表7. 個人の評価（良かった点）（ $N = 33$ ）

カテゴリー	概念	主な記述内容
【人間関係の構築】	子どもたちと関わり遊ぶことができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の子どもたちと仲良く遊ぶことができた。</li> <li>・子どもたちと色々な遊びができた。</li> <li>・遊びを通して子どもたちを触れ合うことができた。</li> </ul>
	積極的に活動をおこなうことができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的に子どもたちと関わる事ができた。</li> <li>・すぐに馴染むことができた。</li> <li>・子どもたちと積極的に関わり、子どもとの遊びを優先させた。</li> <li>・子どもたちのグループに溶け込んで遊ぶことができた。</li> <li>・荷物運びなど積極的にお手伝いすることができた。</li> </ul>
	子ども個々への対応ができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもに応じた話し方ができた。</li> <li>・子どもたちに合わせて遊ぶことができた。</li> <li>・たくさんの子どものがいてもそれぞれに対応できた。</li> <li>・子どもたちに怪我をさせることなく遊べた。</li> </ul>
	自分も一緒に楽しむことができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちと汗をかくまで一緒に楽しんで遊べた。</li> <li>・自分も楽しみながら子どもたちと遊べた。</li> <li>・ボランティアをしていることを忘れて交流を楽しむことができた。</li> </ul>
【周囲への配慮】	周囲を意識して笑顔で挨拶ができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶を心がけ、周囲の様子を意識して行動できた。</li> <li>・笑顔で挨拶ができた。</li> </ul>
【被災地域の理解】	震災体験や現状を見聞きすることができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災の話を直接聞くことができた。</li> <li>・震災を経験した方から当時の話を詳しく聞くことができた。</li> <li>・自分の目で仮設住宅など多くの現状や情報を得ることができた。</li> <li>・復興の現場を肌で感じる事ができた。</li> <li>・薄れ掛けていた被災地の現状を再確認できた。</li> </ul>
	震災の出来事を思い出し、考えることができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災当時の気持ちを改めて思い出すことができた。</li> <li>・被災地に対する考え方が変わった。</li> </ul>

表8. 個人の評価（工夫が必要な点）（ $N = 33$ ）

カテゴリー	概念	主な記述内容
【積極的な姿勢】	積極的に関わることができなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・打ち解けるまでに時間がかかり、早い段階で積極的に関わりをもつべきだった。</li> <li>・もっと積極的に行動すれば良かった。</li> <li>・積極的に声をかければ良かった。</li> <li>・子どもとの関わりが受身になってしまった。</li> </ul>
【対応の難しさ】	対応や関わり方に戸惑った。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の子どもたちから遊びに誘われ、対応に戸惑った。</li> <li>・最初はどうか接していいのかわからなかった。</li> <li>・活動中に対応がわからず戸惑うことがあり、相談するべきだった。</li> <li>・場面を予想して行動して、関わるが必要だった</li> <li>・何をしていいのか時間を持て余した。</li> </ul>
	楽しい雰囲気づくりや内容を考えられなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなで楽しめる遊びを考えれば良かった。</li> <li>・飽きずに最後まで楽しめる雰囲気づくりが必要だった。</li> </ul>
	自然な気持ちで臨めなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然な気持ちで臨みたかった。</li> </ul>
	元気を与えられなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元気を与えるどころか、逆に元気をもらった。</li> </ul>
【支援者間の連携不足】	学生間や他支援者と役割や情報を共有できなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他支援者との役割を分担できず、やることが偏ってしまった。</li> <li>・他のメンバーと連携を図ることができれば良かった。</li> <li>・支援者で役割や活動の流れを共有できず、一部の人にしか情報が伝わらなかった。</li> <li>・同じ日に来ていた高校生ボランティアともコミュニケーションが取れれば良かった。</li> <li>・学生メンバーが固まって行動してしまった。</li> </ul>
【活動目的の消化不良】	幅広い年齢の方々と交流ができなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大人とのコミュニケーションをもっと取りたかった。</li> <li>・子どもたちと遊ぶ時間が多く、保護者とお話や交流する時間を作りたいかった。</li> <li>・もう少し幅広い話題で会話を深めたかった。</li> </ul>
【事前の準備不足】	事前の準備が至らなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に被災地の情報を調べて訪問すれば良かった。</li> <li>・活動内容を事前に把握していれば準備ができたと思う。</li> <li>・活動に行く際の持ち物（着替えなど）を考えるべきだった。</li> </ul>

学生は主に仮設住宅でのボランティア活動を振り返り、「遊びを通して子どもたちと触れ合うことができた。」や「ボランティアをしていることを忘れて交流を楽しむことができた。」、「挨拶を心がけ、周囲の様子を意識して行動できた。」などと記した（【人間関係の構築】と【周囲への配慮】）。また、「震災を経験した方から当時の話を詳しく聞くことができた。」や「自分の目で仮設住宅など多くの現状や情報を得ることができた。」、「被災地に対する考え方が変わった。」など、被害を受けた建物や仮設住宅に暮らす方々の生活環境を目にすることで、震災の出来事を知る機会になったことを記してもいた（【被災地域の理解】）。

しかし、学生は「打ち解けるまでに時間がかかり、早い段階で積極的に関わりをもつべきだった。」や「活動中に対応がわからず戸惑うことがあり、相談するべきだった。」、「他支援者との役割を分担できず、やることが偏ってしまった。」など、初めての活動内容に戸惑いを感じたことを記している（【積極的な姿勢】、【対応の難しさ】、【支援者間の連携不足】）。そして、「子どもた

ちと遊ぶ時間が多く、保護者とお話や交流する時間を作りたかった。」や「事前に被災地の情報を調べて訪問すれば良かった。」「活動内容を事前に把握していれば準備ができたと思う。」など、さらに自分が取り組みたかった内容や被災した地域の情報を事前に収集することが望ましかったことを記している（【活動目的の消化不良】と【事前の準備不足】）。

##### 5. 1日のスケジュール評価（1日のスケジュールで良かった点と工夫が必要だと思った点）

学生はこの1日のスケジュールで良い点を「活動雰囲気」「活動内容や取組みの工夫」「被災地の理解」の3つにカテゴリー化した（表9）。また、このスケジュールに工夫が必要な点を「遊び方の工夫」「体制づくり」「活動内容の提案と思い」の3つにカテゴリー化した（表10）。

表9. 1日スケジュール評価（良かった点）（N = 33）

カテゴリー	概念	主な記述内容
【活動の雰囲気】	参加意欲が高く、みんなで交流できた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生ボランティアが子どもたちを遊びに誘っていた。</li> <li>・活動メンバーの意欲が高く、効果的な活動ができた。</li> <li>・お互いに楽しみながら交流することができた。</li> </ul>
	子どもたちと一緒に楽しく遊べた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員一緒に遊ぶことができた。</li> <li>・孤立する子どもがいないよう皆で楽しく時間を過ごすことができた。</li> <li>・子どもたちと一緒に安全に遊ぶことができた。</li> </ul>
【活動内容や取組みの工夫】	遊び方を工夫することが出来た。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び方を考えることができた。</li> <li>・遊びが充実していた。</li> <li>・普段できないような集団遊びができて良かった。</li> </ul>
	自由に誰もが参加できる活動だった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然体で参加できる活動で、誰にでも人間関係を広められる好機になっていると思う。</li> <li>・自由に活動ができたことが良かった。</li> </ul>
	活動時間や人数が適度だった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地の方々とボランティアの人数がバランスよく、十分に関わることができた。</li> <li>・子どもたちやお母さんたちとそれぞれ関わるメンバーがいてバランスが良かった。</li> <li>・スケジュールが決まっており活動と視察などの時間にメリハリがあった。</li> <li>・視察するだけでなく、一緒に活動に参加するプログラムで場に馴染むことができた。</li> </ul>
	これからの生活に繋がる活動だった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮設住宅に住む子どもたちがいつか「仮設住宅でも楽しい時間があったな」と思い出してくれそうな活動だと思う。</li> <li>・復興の現状を見て、楽しむだけでなく生活に一步踏み込んだ活動ができたと思う。</li> </ul>
【被災地域の理解】	仮設住宅に住む方々の様子が分かった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮設住宅に住む子どもたちが元気で良かった。</li> <li>・仮設住宅に住む方々の元気な姿が近所とのつながりを見ることができた。</li> </ul>
	震災からの復興過程を自分で見聞きすることが出来た。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真や映像ではなく、自分の目で実際の現場を見ることができた。</li> <li>・他団体の取組みや支援過程を伺うことができた。</li> <li>・被災地であっても、支援をする・されるの関係でなく、普通の子供たちであると思った。</li> </ul>

表 10. 1日スケジュール評価（工夫が必要だった点）（N = 33）

カテゴリー	概念	主な記述内容
【遊び方の工夫】	子どもたちと遊ぶ際の安全性を考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び道具で怪我をしない工夫がもっとあれば良かった。</li> <li>・外遊びを充実させることが必要だった。</li> <li>・天候に影響しない遊びを考えておくべきだった。</li> <li>・遊び方をチーム戦にする工夫が必要だった。</li> <li>・遊ぶ前に注意点やルールを決めれば良かった。</li> <li>・遊び方に工夫が必要だった。</li> </ul>
【体制づくり】	<p>相手を思い、周囲の様子を気にかける。</p> <p>時間を持って余さない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・携帯ゲームで遊ぶ子どもと関わることができなかった。</li> <li>・対応する子どもに偏りがあった。</li> <li>・目の届きにくい子どもたちにも声をかえるべきだった。</li> <li>・遊びを提供してリードする姿勢があれば良かった。</li> <li>・リーダーシップを取る人がいなく、まとまりがなかった。</li> <li>・緊張して活動に入り込むまでに時間がかかった。</li> <li>・自分のことで精一杯になり余裕がなかった。</li> <li>・何をすればいいのか戸惑い、やることを考えておくべきだった。</li> <li>・活動開始時は学生が集団でいるだけだった。</li> </ul>
【活動内容の提案と意思】	<p>さらに震災体験や被災地の現状を知る。</p> <p>事前準備や継続的に活動を展開する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもと関わる時間が多く、大人との交流時間を設けてほしかった。</li> <li>・仮設住宅に住む方々の関係がわからなかった。</li> <li>・もう少し被災した場所の見学がしたかった。</li> <li>・移動の距離が長く、活動時間の関係上、視察場所で詳しく話を聞けなかった。</li> <li>・世代の異なる人たちが一緒に時間を過ごせる活動も大事だと思った。</li> <li>・被災地の事柄をもう少し把握していくことが必要だった。</li> <li>・支援することよりも提供されたものが多く、次回は私たちからも何か渡したい。</li> <li>・もっと早くから仮設住宅での支援に関心をもっていれば良かった。</li> <li>・帰る際に子どもたちが寂しそうな表情をしていたため、継続的な活動が必要だと思った。</li> </ul>

学生は「活動メンバーの意欲が高く、効果的な活動ができた。」や「全員一緒に遊ぶことができた。」など、活動の雰囲気が良かったことを記している（【活動の雰囲気】）。また、「普段できないような集団遊びができて良かった。」や「子どもたちやお母さんたちとそれぞれ関わるメンバーがいてバランスが良かった。」、「仮設住宅に住む子どもたちがいつか「仮設住宅でも楽しい時間があったな」と思い出してくれそうな活動だと思う。」など、活動内容や取り組みに工夫があったことを記してもいる（【活動内容や取組みの工夫】）。「写真が映像ではなく、自分の目で実際の現場を見ることができた。」や「他団体の取組みや支援過程を伺うことができた。」など、被災した地域を理解することにもつながった（【被災地域の理解】）。一方で、異年齢の子どもたちとの遊びから「遊び道具で怪我をしない工夫がもっとあれば良かった。」や「遊ぶ前に注意点やルールを決めれば良かった。」など、子どもたちに応じた遊び方が必要だったと記している（【遊び方の工夫】）。そして、「対応する子どもに偏りがあった。」など、人との関わりに難しさを感じており、「何をすればいいのか戸惑い、やることを考えておくべきだった。」など、時間を持って余す状況にあったこともわかる（【体制づくり】）。1日の限られた時間で活動場所を移動することから「も

う少し被災した場所の見学がしたかった。」や「帰る際に子どもたちが寂しそうな表情をしていたため、継続的な活動が必要だと思った。」など、1日のスケジュールに提案もあった（【活動内容の提案と思い】）。

## V. 考 察

### 1. 被災した地域にも暮らしがあること

筆者はこれまでに避難所や仮設住宅を訪問し、住処を変えながら生活を続ける人々の様子を目にしてきた。2015年度および2016年度にボランティア活動をおこなった仮設住宅では、もうすぐ復興住宅の整備が完了し、自立再建者を含めて本格的な引越しが始まる(2017年春)。そして、その後は仮設住宅を取り壊し、公共施設の整備が進められることをうかがっており、復興事業は確実に進んでいることがわかる。しかし、ボランティア活動に参加した学生の記録には、「自分の街に比べて沿岸地域の復興は進んでいないように見えた。」や「メディアで震災情報は減り、被災地の復興は進んでいるイメージがあるように思う。しかし、あまり復興は進んでおらず、これからだという印象を受けた。」と目にした地域の様子を記している(表4)。また、「自分が想像した以上に仮設住宅があり、未だに多くの人が仮設住宅に住んでいることに驚いた。」とも記している(表4)。今なお大規模な敷地に平屋の仮設住宅がいくつも並んでいる光景は日常的とは言い難い生活だろう。学生は、被災した地域にも新たな生活が形成されていることを期待していたようにうかがえる。だが、予想とは異なる実情を目にしたことで、「仮設住宅で長く暮らしている。」や「復興住宅が足りない。」などと、今日までの生活への苦労や困りごとを記していた(表5)。そして、「子どもたちの遊ぶ場所が少ない。」や「子どもが勉強できる場所が限られている。」ことも記されている(表5)。学生は仮設住宅に暮らす子どもたちと一緒に遊ぶことで、そこに住む人々の生活を垣間見ることができ、被災した地域に暮らす人々の生活環境を理解することにつながったのだろう。

しかし、被災した地域特有の生活環境ばかりを捉えるのではなく、ある学生は「被災地であっても、支援をする・されるの関係でなく、普通の子どもたちであると思った。」と記している(表9)。『被災地』という言葉に学生は大きな被害を受けて厳しい生活が続く場所だと認識する傾向がある。この学生も『被災者』という言葉で、その地域に暮らす人々を捉えていたことがうかがえる。また、「仮設住宅に住む方々の元気な姿や近所とのつながりを見ることができた。(表9)」と記していることから、学生は想像していた被災地域の概念をボランティア活動を通して崩すことにつながったように思う。学生は、「仮設住宅ではコミュニティが形成されにくく、希薄であると思っていた」と記してもいたからだ。そして、学生は1日のスケジュールを振り返り、仮設住宅でのボランティア活動を「仮設住宅に住む子どもたちがいつか「仮設住宅でも楽しい時間があったな」と思い出してくれそうな活動だと思う。」や「復興の現状を見て、楽しむだけでない

生活に一步踏み込んだ活動ができたと思う。」と記している(表9)。そのため、学生が自身に可能な支援内容として「自分の目で見た被災地の現状を周囲の人に伝えて風化させない。」ことを記している(表6)。この震災での出来事を知り、事実を風化させないことや継承していくことも支援の一つではないかと考えているのだろう。ある学生は「帰る際に子どもたちが寂しそうな表情をしていたため、継続的な活動が必要だと思った。」と、ボランティア活動を継続していくことへの期待を記している。

筆者はボランティア活動への参加者を募る際、学生から「一度も行ったことがないので、どのようなところか行ってみたい」や「被災状況を見てみたい」という場所への関心の高さを表す言葉を耳にしてきた。筆者はこのボランティア活動を通じて、いつまでも『被災地』は生活が困難な場所ではなく、そこに暮らす人々は変化に応じた生活の営みを創り出していることを伝えられたように思う。

## 2. 被災した地域から「生命」の尊さを学ぶこと

筆者は2015年度および2016年度に取組んだボランティア活動に、被災した建物や地域の情報を発信する施設の見学を組み入れて1日のスケジュールを設定した。2014年度までにおこなったボランティア活動では、あくまでも被災した人々を支援することに重点を置き、必要とされていた避難所や仮設住宅で過ごす時間が多かった。しかし、震災からの時間の経過とともに、筆者は支援内容にも変化があることを感じ、その地域で起きた出来事も学生に学んでほしいと思うようになった。そこで、2015年度以降は、被災した建物や地域情報を発信する施設の見学を決めた。

避難所でのボランティア活動に参加した学生は「被災者に自分から震災の話しをしてはいけない」や「津波のことを思い出させるような悲しい会話を出してはいけない」と被災した人々の心情を察しながら関わっていた。そして、継続的に避難生活の一部に関わることができ、日常とは言い難い困難な状況下でも生きることの強さを被災した人々から汲み取ってもいた。しかし、被災した地域の様子も震災当時とは異なり、ボランティア活動内容も変化している。そのため、仮設住宅を訪問するばかりでは被災した人々の心情を理解することは難しい。結果からも被災した人々の生活に「何も困っている様子は無かった。」と記す学生がいた(表5)。「仮設住宅に住む方々の関係がわからなかった。」とも記していることから、短時間では被災した人々を理解することは困難な状況にあった(表10)。また、「何をすればいいのか戸惑い、やることを考えておくべきだった。」とも記された(表10)。筆者は、避難所でボランティア活動を始めた当初より、学生には自らの意思で柔軟に行動することを求めてきた。今回のボランティア活動でも、学生に①被災した地域の実状を知る(被災した建物や情報交流館の見学)、②仮設住宅に暮らす子どもたちの遊びを支援する、③他のボランティアグループと共同で支援をおこなうという3つの特色を伝えたものの、個人の動向や役割を詳細に決めることはしていない。そのため、学生によっては、仮設住宅を訪問して子どもたちと一緒に遊ぶ際、どのような関わり方をしてよいのか

不安と戸惑いで行動ができないこともある。そして、自らの役割を見出せずに立ち尽くしてしまう場面も見られた。だが、ときには、子どもたちやその保護者から震災当時の様子を耳にすることができ、真剣に聞き入れる姿があった。大きな揺れを感じた直後や高台に避難した時の様子、その後の避難生活から仮設住宅で暮らす現在までなど、実際に体験した人々の語りは学生の心を動かしたように感じられた。今を生きている人々と向き合い、限られた時間ではあるが、何かをしなればと行動に移そうとする姿勢があった。

そして、ある学生は「津波の被害を受けた建物を見て、二度と同じようなことは起きてほしくないと考えた。」や「写真や映像でしかわからなかった被災地の様子を見て、今も深い爪痕が残っており、悲惨な状況を経験した方の辛い思いを考えさせられた。」などと記し、震災の出来事から学びを得ていた（表4）。被災した建物や地域の情報を発信する施設を見学することで、学生は自分が直面した際の状況を想像し、何ができるか、何をすべきかを考えていることがうかがえた。また、「写真や映像ではなく、自分の目で実際の現場を見ることができた。」や「犠牲になった方々の苦しい思いを考えると、テレビの映像で見た時よりも何倍も胸が苦しくなった。」と記したことからも、津波被害の爪痕を残す建物を目にして、そこで起きた出来事を想像しながら、命の尊さを改めて考えることにもなったのだろう（表9）。学生は、これからも起こるであろう自然災害への備えや防災・減災意識の向上につなげられる機会にもなり、「津波の被害に遭った地域を見て、改めて災害の恐ろしさを感じた。」とも記している（表9）。

2017年春、震災で犠牲となった人々の7回忌法要がおこなわれる。毎月11日という日を迎える度に、そして毎年3月11日という日を迎える度に、被災した地域には特別な思いを寄せる人々がいる。このボランティア活動を通して得た体験と学びは、自分の命をどのように守れるのかを考える機会にもなったのではないだろうか。この「生命」の尊さを学ぶことも防災教育のひとつに結び付けられるのではないかと示唆し、今後も被災した地域の復興と発展を願いたい。

## 謝 辞

本研究は文部科学省の戦略的研究基盤形成支援事業（平成24年度～平成29年度）による私学助成を得ておこなわれた研究の一部である。また、大和証券福祉財団による第5回災害支援ボランティア活動助成を得て継続的な仮設住宅訪問活動をおこなうことができた。これまでのボランティア活動にてお世話になりました皆様を含め、ここに感謝の意を表す。

## 引 用 文 献

- 1) 阿部利江（2015）「仮設住宅に暮らす子どもたちのエンパワメントを目指した支援プログラム評価 第1報—訪問活動に参加した学生より—」『東北福祉大学研究紀要 第40巻』pp 19-34

- 2) 和井田節子・田中拓也・小林田鶴子他 (2013) 「被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味—石巻市内の小学校における支援活動を通して—」『共栄大学研究論集 (11)』 pp 251-272
- 3) 三浦剛, 阿部利江 (2012) 「被災地の生活支援におけるソーシャルワークの役割—これまでのいくつかの支援活動の検討から—」日本地域福祉研究所 pp 19-29